

2007年9月15日  
第172号

題字 住谷悦治



燎原社  
(京都の民主運動史を語る会)

代表 岩井忠熊

事務局  
京都市左京区高野東開町1-23  
第三住宅33-302 井手幸喜  
〒606-8107  
tel & fax 075 (722) 3823

87年の歴史に  
幕を閉じたデパート

写真是1963年当時の丸物。  
手前は建設中の京都タワービル。  
(閉店記念絵はがきより)

## 丸物(近鉄)百貨店と 「原爆展」1951 「戦争展」1981

この | 枚  
[連載]



熱気のこもる「総合原爆展」会場(51年7月)



「平和のための京都の戦争展」(81年夏)

- 【連載】樹々の縁を—戦後京大学生運動私記— 第2回  
【連載】滝川事件以後 十五年戦争期京大学生運動の断章(四)  
憲法垂れ幕と嵯峨虎三知事  
【新連載】忘れ得ぬ人 原田久美子さん  
エッセイ 続 近況あれこれ

12

大江 洪 小畠哲雄  
岸 伸子 岩井忠熊  
村島昭男 村島昭男

11 10 8 5 2

大江 洪 (おおえ・たけし)  
区在住。

元全労連議長。前労働総研代表理事。西京

岸 伸子 (きし・のぶこ)  
札幌女性史研究会会員・王子製紙争議を語りつぐ女性たちの会・事務局、北海道美瑛町在住。

小畠哲雄 (おばた・てつお)  
元京都大学同学会執行委員。長く大阪私教職員組合委員長などをつとめる。八幡市在住。

### 執筆者紹介

今年2月28日、近鉄百貨店京都店(プラツツ)が閉鎖されました。1920年に「京都物産館」として京都駅前に開店、34年に「丸物」となり、77年には「京都近鉄百貨店」に変わりましたが、駅ビルの影響などで、閉鎖されたもの。このデパートでは、1951年7月14日から10日間、京大同学会主催の「総合原爆展」が催し会場で開かれ市民ら3万人が来場しました。また1981年7月30日から8月5日まで開かれた最初の「平和のための京都の戦争展」の会場もここでした。7万人が来場したと記録されています。

## 樹々の緑を

戰後京大学生運動私記

小畠  
折羅

事基地反対の闘争の中核となつてゐた。その模様を見てきて、ルポルタージュを書くというのが私の任務であった。(私には、京大文学サークルのメンバーとして、「あかしごろう」のペンネームで、詩や文

## 〔同学会の再建〕

五三年のことを書いた。我等が未来のために」は、自治庁通達に端を発した学生選挙権の問題については、かなり詳しく、というよりは非常に詳しく経過を書いている。ところが、ほぼ同じ頃、京大の中で大きな問題になっていた「同学会再建」の問題については、まったく触れていない。入学して間もない一回生で、この問題にほとんどかかわっていなかったからかもしれないが、この落差の大きさには驚く。

私は、「天皇事件」の後始末という点でも、ここでふれておく必要と責任があるだろうと思うので、あえてこの問題に焦点を当てたい。

同学会の再建、という課題は、解散されただすぐあとから始まっていた。それは、五十二年三月の各学部の自治会連合として学長あての「上申書」を提出するという形であつたが、大学側は、「自治会連合」という組織は、大学の公認する組織ではない、という理由でこの上申書の受け取りそのものを拒否している。

さらに五月には、同じく、全学部自治会  
代表者会議は「全学自治会再建連絡協議会」  
の発足をきめ、井上学生部長に申し入れを

行い、一日は受理された。ところが、その後、東京から帰ってきた原田学生課長から、学長の意向として時期尚早として拒否されたりもした。

一九五三年になると、一月の河上祭に一五〇〇人が参加している。そしてその直後、同学会再建準備委員会が正式に発足している。それは、新たなもりあがりを予感させるものであつた。

第三回 参院選と内灘闘争

候補者カ一とはいっても、候補者は、主  
要な場所で車をとめて乗り込み、街頭演説  
をする時だけ。あとは、京都府議会、市議  
会の民統派議員さん、そして私は司会をし  
たり弁士をしたりである。議員さんたちは、  
要所要所で乗り込んでくるので、府下全体  
を通して乗っているのは私だけであった。  
乗用車でない、トラックの荷台に乗り詰め  
の強行軍であった。最後に笠置町について、  
トラックの上から満開の桜を見たときの印

飛び込み、いまから内灘に行きます。旅費のカンパをお願いします、と訴えた。多くの学生がカンパに応じてくれた。総額千円とちよつとのカンパが集つた。ただし、そのほとんどが硬貨であった。私の鞄は膨れあがり、とても重かつた。当時の学割は五割引であつたから、夜行の普通列車でな

トラックの上から満開の桜を見たときの印象は、今も忘れることができない。

月四日、突然、石川県の内灘に行け、と言われた。その指示がどこからであったのか、正確には憶えていない。しかし、それは、実行しなければならないものであつた。

内灘の砂丘地に害  
单付塹の試付場を作

村の人々は反対の行動を起こしている。

それは、全国的な軍



「都新聞」1953年6月7日付

た。 ら、 これで往復の旅費はなんとかまかなえ

六月五日、六日の両日、私は内灘の村を歩き、村民が、鉄条網を越えて出漁し、あるいは、試射のさいの着弾地に座り込んで

そのことを知った夕刊紙の「都新聞」の記者が、この頃三河高の電話で、毎日二通の電話を送つてゐる。

## 高らかに同学会再建を宣言

者から刺された肩痛も電話で送った。肩痛も、電話代ももらえなかつたが、その記料も、「京大同学会調査員現地見出しひには、「私の見た内灘砂丘」とあり、その下に、「京大同学会調査員現地ルポ」とつけられている。同学会は、再建

議員の選挙は、六月の二十二日から二十四日にかけて行われることになったのだが、その間にも、いくつかの「できごと」があった。

まだ正式には再建されていない。しかし、に向かって、大詰めの段階にあつたのだが、その頃には、こういう表現をマスメディアがしても、不思議ではない、そういう状況

六月十一日から十六日にかけて全学連の第六回全国大会が開かれていた。玉井君に代わって、立命館大学から阿部委員長が選出された。

になつていたのである。私はまだ内灘のルポルタージュを「学園新聞」と「学園評論」にも書いた。

その直後の六月十八日、自治局は、「学生の選挙権は原則として郷里に置く」旨の通達を出し、これがたちまち大きな問題となつた。下宿や寮にいる学生の選挙権は、「郷里」にあることになり、選挙のたびに帰省しなければならないというのである。この「自治局通達」は事実上、学生の選挙権を奪うものとして、大きな反響を呼びお

【学園新聞】の当時の記事の見出しを見ると、六月四日、服部学長が、全学自治会再建には、全学投票で最低三千票がほしいと語つてゐる。そしてその数日後、六月九日から十一日までの間に、同学会再建に関する全学投票が行われた。その結果は、投票総数四六七二、投票率六八・一%で、うち四五五六八名（九七・八%）が賛成、圧倒

的多数の支持であつた。規約については四〇六〇名（八六・九%）が賛成、同学会の

あたっては、各学部を選挙区とする「学部区」のほかに「全学区」というものがあつた。ここは、学部及び分校を選挙区とする者が単記投票であったのに対し、二名記記となっていた。そして、「全学区」には運動部関係を含めて学内の諸団体が候補者を立て、二倍の競争になると予想されてい

願者が思うように集つていなかつた。朝鮮へ戻つてから、戦争の特需景気で、若者の就職状況が大きく変わつてゐた。保安隊を指揮する大橋法務総裁が「徴兵制復活」を示唆するという状況になつてゐた。そしてそのことが、戦後間もない若い学生達の心に、かなりの反響を呼びおこしてゐた。率直に言つて、「徴兵制反対」は、戦争時の記憶を持ち合わせている当時の学生にとっては、「焦眉の急」の思いで受け止められたのであつた。

宇治分校での選挙結果は、共産党公認候補の票が圧倒的に多かつた。ただし、私は、その演説のとき、自分の名前を言うのを忘れていた。それで、最高点とまでは行かなかつた、とあとで笑われた記憶がある。

選挙が終わり、民主的な代議員が圧倒的多数で当選した。第一回の代議員会は、六月二十七日に開かれ、井上学生部長の挨拶、角南学生課長の激励を受けた後、正副議長として、高橋哲郎君、荒木和夫君の二人を選出したのち、米田再建準備委員長の経過報告、規約の確認をおこなった後、別掲のような「再建宣言」を採択した。

そうして中央執行委員長には米田豊昭君、副委員長には大島渚君、小野一郎君の二人を選出した。しかし、大島副委員長は、その後、京都府学連委員長に、そして九月の全学連中央委員会で、病気のため途中降板を余儀なくされた阿部委員長に代わって、文字通り急遽、米田委員長が全学連の委員長に選出されることになった。副委員長の小野一郎君が委員長に昇格就任した。

## 半年にわたる学生選挙権闘争

私は、この同学会再建とほぼ同時に関西

学連書記局に通うことになった。自然、同業の合間を縫つて、大阪市大内にある関西

## 京都大學同學會再建宣言

我々はこゝに同學會再建を宣言する。

同學會は学生四千七百の投票によって再建された。そしてこの投票は、学生部、学内の教授職員の大瓶分の人々の協力によってなされた。

そのことは同學會が学生のみでなく京大の教授職員の人々の熱烈な支持と希望を背負つてゐることを示している。

それだけではない。「同學會の再建を心から喜んでおります。」との手紙を寄せた兵庫県の「平凡」を愛読している農村女性、再建を心待ちしていた多數の市民、さらにまた、天皇事件によつて解散されたとき激昂をよせたブルースト・バンブルグ・ダーテゼラなどの人々、

金學生再建を支持された教諭先生、職員諸君、日本おおよび世界の同學會再建を支持する諸君、

心から同學會再建の万才を唱えよう。

思い起せば、天皇事件による同學會解散以来一年半。しかし、天皇事件にさいし、我々が全日本おおよび全世界に訴えた四十万の公開賛問状、これこそが同學會再建運動の第一歩であつた。

破防法が出され、日経声明が出されたとき、文化祭のたびごとに、対東大騒、定期騒、そしてまた備再建運動などのたびに、我々は同學會再建を考え、訴えた。

そしていま、全学生、否、全京大の結集によつて同學會が作り上げられた。

この同學會の再建は、まさに昭和十六年四月の同學會の成立に比すべき歴史的事業である。

近衛首相の新体制運動によって全国に「報國團」が成立したとき、京大は羽田總長を先頭に「學風に合わぬ」という理由をもつて「報國團」を拒否し、同學會が成立した。なるほど同學會は出陣学徒に「お守り」を送る京都帝國大學同學會ではあつたが、しかし沈黙の抵抗の産物であった。まさに、河上、瀧川と続く我々の輝やかしい大先輩たちの反戦自由の伝統の産物である。

いまや同學會は再建された。しかも、戰爭の脅威が迫り、大学の予算は軍事予算にふみじられ、学生のみならず、教授、職員の生活が苦しくなり、あらゆる国民の自由がふみにじられているときだ。

しかし内讃では、農民の土地の上に砲彈が射たれ、富士の山麓では、日本人であつて外國の軍隊である保安隊が大演習をしていくときに、

金京大の學生自治組織が空襲あげて再建されたのだった。

同學會は河上、瀧川の大先輩に導かれつゝ、反戦自由の輝やかしい伝統をうけつぎ発展させる。

新しい同學會は、京大の築き上げられた、そしてまた築き上げられるある学問を守り抜き発展させ、そして國民のものにして行く。

新しい同學會は、学生のみならず、教授職員のよりよき生活を守りぬく。

新しい同學會は、学生生活を明るく樂しくするため、一切のスポーツ・文化・厚生運動を奨励する。

新しい同學會は、日本および世界の学生と、そしてまた平和を愛好するすべての人々と、民主的に奮闘させる。

新しい同學會は、日本および世界の学生と、そしてまた平和を愛好するすべての人々と、民主的に奮闘する。

一九五三年六月二七日

## 京都大學同學會

学会執行委員ではあつたものの、京大内部のことには、あまりかかわることがなかつた。しかしこの年の夏、全国を襲つた風水害の救援活動の組織には、大学の厚生部と協力して取り組んだ記憶がある。遠く熊本まで救援隊を送つたものである。

しかし、この頃の私の活動は、例の「自治廳通達」の撤回を求める闘いを全関西的にひろげることが第一義的であつた。京都、大阪には、府学連の組織が確立している。

しかし、関西のその他の地域、兵庫、和歌山、奈良、滋賀の各県には、学生運動のセンターが確立していない。そこにどうてこ入れして行くか、私の主要な任務はそこにあつた。

「滋賀大学」といつても、教育学部は大津市、経済学部は彦根市と、まったく離れたところにある。旧制の師範学校、経済専門学校が、それぞれ新制大学の学部となつただけ、である。彦根の街に何日間か泊り込んで、なんとか経済学部の自治会をこの「選挙権闘争」に立ち上がらせるところまで働きかけた。

奈良には、国立大学が二つある。奈良女子大学と、奈良教育大学である。ほとんどの地方では、その県内にある旧制高校、専門学校などを統合して、一つの大学になつたのであるが、何しろ、お茶の水と並ぶ

上京、参加してくれた。

この闘争は、約半年にわたる息の長い運動になつた。しかし、学生の選挙権は、寮、下宿ではなく、郷里にある、帰つて投票で上京、参加してくれた。

この闘争は、約半年にわたる息の長い運動になつた。しかし、学生の選挙権は、寮、下宿ではなく、郷里にある、帰つて投票で上京、参加してくれた。

この闘争は、約半年にわたる息の長い運動になつた。しかし、学生の選挙権は、寮、下宿ではなく、郷里にある、帰つて投票で上京、参加してくれた。

わいなことに手がかりがあつた。その当時、京大の二回生であった山崎正和の鶴沂高校時代の親しい仲間であるMさんがいた。なまめかしい山崎がかつて会長をしていた鶴沂高校の生徒会は、全国でただ一つ全学連に加盟している新制高校の自治会であつた。活動家は、ずい分いた。その中の多くが大学に進んでいた。Mさんもその一人であつた。そのMさんが奈良女子大への工作の唯一の手がかりであつたが、彼女を通して、「男子禁制」の寮にも入ることもでき、選挙権問題について奈良女子大の学生たちと語り合うことができた。こうして奈良女子大の自治会も選挙権問題の闘争に立ち上がり、十月二十八日、東京で開かれた「選挙権と民主主義を守る全国学生大会」に、夜行列車に乗り込んで、委員長以下代表団が上京、参加してくれた。

この闘争は、約半年にわたる息の長い運動になつた。しかし、学生の選挙権は、寮、下宿ではなく、郷里にある、帰つて投票で上京、参加してくれた。

この闘争は、約半年にわたる息の長い運動になつた。しかし、学生の選挙権は、寮、下宿ではなく、郷里にある、帰つて投票で上京、参加してくれた。

この闘争は、約半年にわたる息の長い運動になつた。しかし、学生の選挙権は、寮、下宿ではなく、郷里にある、帰つて投票で上京、参加してくれた。

この闘争は、約半年にわたる息の長い運動になつた。しかし、学生の選挙権は、寮、下宿ではなく、郷里にある、帰つて投票で上京、参加してくれた。

その奈良女子大への働きかけには、さい

(以下次号、中身出しは編集部)

# 淹川事件以後 十五年戦争期京大学生運動の断章

(四)

岩井忠熊

## ファシズムの潮流と学生

時事情報は大学で

淹川事件のおこつた一九三三年にドイツではヒトラー内閣が成立し、間もなく授権法によりヒトラー独裁体制が確立した。それとともにヨーロッパの情勢も不安定となる。ドイツはロカルノ条約を廃棄し、ライン非武装地帯に進駐し、さらにはエダヤ人への組織的迫害がはじまつた。

こうした動向に対しとくにフランスでは反ファシズム運動が高揚し、三六年にブルム人民戦線内閣が成立した。スペインでも人民戦線内閣ができたが、植民地モロッコ駐屯軍司令官フランコを中心として政府への反乱がはじまり、スペイン内乱は三九年にフランコがわの勝利までづく。

日本国内では三五年に右翼と陸軍による美濃部達吉博士の天皇機関説攻撃がはじまり、国体明徴論が推進された。京大法学部では憲法担当の渡辺宗太郎教授を黒田覚教授にかえた。陸軍内部では皇道派と統制派の抗争が流血をともなつてくり返され、ついに二・二六事件のクーデ

ターとなつた。しかも陸軍では華北を中心で紛争をくり返し、海軍は三六年に海軍軍縮会議を脱退して、空前の大建艦計画に着手したのである。軍の政治的進出が強まり、二・二六事件後の広田内閣、林内閣は事実上陸軍のあやつるロボット内閣と見られた。

以上のような情勢の進展は、統制されではいたが普通の新聞・雑誌を読むことで大体を理解できたはずである。海外の新聞雑誌を取り寄せればそうしたニュースはもつとくわしく知り得たが、それはかなり高価だった。当時の学生層は時事ニュースに敏感である。事の次第によつては自分の運命も左右されかねない。大学の図書館・研究室また講義は学生の重要なニュース源であり、内外情勢の見方を教えてくれる貴重な場であった。淹川事件で圧倒的多数の学生は淹川教授追放に反対し、大勢順応主義の教授の授業をボイコットしたが、夏休みがあけると彼らはいつの間にかぞくぞくと講義を受講はじめた。闘争を主導してきた高代会

議も、学生はもともと学びたいという要求をもって大学に入ってきたのだから、その要求を満足させる方向へ、闘争の力点をおいていくべきだとの主張が強まつた。

こうして学生たちは所属学部の専門別研究会の組織と、出身高校別の研究会に取りくむようになった。後者の場合は資本論をはじめマルクス主義の古典や入門書の読書会がほとんどであり、六高同窓会などは「剪燈」という会誌を三五年四月から三八年まで年二回出していた。経費は広告収入だったといふから合法誌で、それでも学内や学生の問題を取り上げて批判的立場で終始したらしい。現在残存が確認されていないのが残念だ。

こうした研究会活動は二六会と高校同窓会という線で組織され、淹川事件での活動家の思想の影響をより強固に発展させ、根づかせようという意図がつらぬかれていた。しかしこうした学生の活動は、

さわしい学術的な合法的な存在であつたから、堂々と大学の楽友会館を使つてもつことができた。

こうした研究会活動は二六会と高校同窓会という線で組織され、淹川事件での活動家の思想の影響をより強固に発展させ、根づかせようという意図がつらぬかれていた。しかしこうした学生の活動は、学内の研究会にだけ發揮されたわけではない。当時の複数の活動家だった先輩から戦後に聞いたところでは、在野の長谷部文雄宅での資本論研究会、梯明秀宅での哲学研究会(ボルケナウ「近代世界観成立史」等)がひそかにもたれ、特高の監視をかすめて出入に苦労したと。もちろん下宿での小さな勉強会は無数にもたれており、その様子は野間の小説の各所にえがかれている。

## 弾圧と非合法活動への警戒

学部別では法学部で刑法研究会、法理学研究会、公法研究会が組織され、高等文官試験のための研究会でも学生が集まるのなら歓迎という方針だった。経済学部では農学部学生と共同して産業組合研究会をつくり、農学部橋本伝左衛門教授という右派の大物を顧問にかつき、近藤康男「協同組合論」をテキストに使って合法性のタテとしたが、出席学生のほとんどは講座派の支持者だったという。経

済学部ではややおくれて三六年に有田正三(六高、経2)堀江英一(五高、経2)らが産業組合研究会を谷口吉彦教授ゼミを中心としてつくっているが、前記の産業組合研究会をモデルにしたという。翌年には野口俊夫(三高、経2)が世話役で古典経済学研究会、松尾賢一郎(三高、経2)が世話役で経済学研究会がつくられた。文学部では藤谷俊雄らによる主として時代別の歴史学研究会ももれた。

会活動が中心となつていったことはたしかである。だがその背景には非合法活動との接觸への警戒があつたことも事實だつた。それまで学生の活動家が党や共青團と連絡がつくと、すぐに街頭連絡や、いわゆるレボ（主として文書の連絡）要員にされ、また非合法機關紙「赤旗」の運搬任務につかされた。時にはそのころ党の指導下にあつた全協傘下の労働組合のオルグにされた例もある。

特高警察は必死に党・共青・全協の組織の探知につとめ、そのためにそれら組織内へスパイさえ送りこんだ。当時それらの組織の末端で活動した人たちはかならずしも党員や共青員だったわけではなく、ほとんどは協力者だった。彼らに連絡をつけてくる人たちはみな仮名（ペンネーム）を使い、党や共青の機關メンバーレと推測されるものの、協力者は実名も人柄もまったく知らないという間柄である。末端の人物が検挙されると、どうして自分と非合法組織との関係が特高に知れてしまつたのかという疑問が生ずるのは当然であろう。それまで自分に連絡をつけてきた人物が逮捕され、拷問で口を割つたのか、あるいはスパイの密告のせいだらうか。

れてしまうことが常識だった。

学生たちが非合法活動を警戒し、自分たちの組織活動の維持発展のためには、まず学内に根をおろし、さしあたって高校の同窓会活動と研究会の組織化に力をそそいだのには、以上のような情勢認識が背景にあつたのである。大学内での活

人民戰線と『學生評論』

## 反ファシズムの国際的動向

特高警察は必死に党・青共・全協の組織の探しにつとめ、そのためにそれら組織内へスパイさえ送りこんだ。当時それらの組織の末端で活動した人々はかなりらぬしも党員や共青員だったわけではなく、ほとんどは協力者だった。彼らに連絡をつけてくる人々はみな仮名（ベンネーム）を使い、党や共青の機関メンバーラインと推測されるものの、協力者は実名も人柄もまったく知らないという間柄である。末端の人物が検挙されると、どうして自分と非合法組織との関係が特高に知れてしまつたのかという疑問が生ずるのは当然であろう。それまで自分に連絡をつけてきた人物が逮捕され、拷問で口を割つたのか、あるいはスパイの密告のせいかどうか。

戦争とファシズムの足音に敏感に反応した人たちに、文化人の一群があつた。ナチス・ドイツが特に力を入れたのは「反民族的」と見なした「文化」の殺戮であり、「焚書（ふんしょ）」さえおこなわれた。迫害にたえられずに、ユダヤ人だけなく多くの文化人・知識人たちが国外に脱出・亡命した。このような情勢の中で、フランスではファシズムに抵抗する人民戦線の活動が活発に展開された。さまざまの著述や新聞雑誌が刊行され、文学、映画、建築、音楽、美術、演劇、ラジオなどの分野で反ファシズム的な運動の大衆化をめざす「文化の家」の運動が推進されていったのである。他方で三五年にコミニテルン第七回大会が開かれ反ファシズム統一戦線戦術についての決定がなされた。デイミットロフ報告として知られた内容である。

五年に二回ミンテルン第七回大会が開かれ、反ファシズム統一戦線戦術についての決定がなされた。デイミトロフ報告として知られた内容である。

動なら、おたがいの人がらも熟知し、ま  
ずスパイの入りこむ余地はなかつた。た  
だ特高警察が学生課と緊密に連絡し合ひ  
ながら学内をかぎ回ることだけは、どう  
しようもなかつた。このような情勢で、  
公然とした合法的活動を重視したのは學  
生たちだけではなかつた。

廬溝橋事件直後の八月に同人たちが治安維持法違反で検挙された。コミニンテルンの方針など読んだことのない人たちである。

「世界文化」誌は新村猛、和田洋一、真下信一、中井正一、久野收、ねず、まさし等が中心的メンバーだった。反ファシズムを方針としたが、合法的出版物として検閲にひつかからないように日本の問題にふれることをさけ、欧米の新聞・雑誌その他によって世界の反ファシズム文化運動の動向を紹介した。当時の検閲制度で一ぺんも禁止・削除はおろか注意の処分さえ受けたことがなかつたが、すでに刊行をひかえた三七年一月以降に関係者がつぎつぎに検挙された。メンバーは自由主義からマルクス主義者までさまざまの傾向をもつ知識人。中心だった新村・和田・真下はいずれも同志社大学予科教授だった。起訴された理由は治安維持法違反で、コミニンテルンの方針について活動したとされたが、実はほとんどの人たちは第七回大会の方針なるものを見たことも聞いたこともなかつたのである。

中井や能勢克男（前同大教授）らは、「世界文化」関係者らの後援を受けながら、大衆的啓蒙の週刊タブロイド紙「土曜日」を三五年七月に創刊号を出し、三七年一月、通巻四四号までづけた。こうして反ファシズム運動が重視したのは「文化の擁護」という共通のスローガンだつたといえる。

## 「京大新聞」退部者らが学外で発行

学生たちも研究会活動では結集できる学生層があまり多くないことを問題とした。しかし新聞部長西田直二郎教授が滝川事件関係記事の掲載を禁止したことに対抗して、新聞部員が退部した後の「京大新聞」に期待をかけることはできなかつた。そこで退部した新聞部員である前号記述の五人にさらに藤谷俊雄、永島孝雄（広島、文2）、西田勲（六高、経3）、長尾孫夫（法卒）佐々木時雄（浪速、経2）、田中正世（新潟、経2）、村上尚治（広島、文2）、太田怜（姫路、経3）、柳原正之（成城、農1）野口俊夫（三高、経2）、布施杜生（松本、文2）、内海省三（六高、経2）らが加わって、三六年五月に「学生評論」第一号を発行、三七年六月に通巻一〇号の発行がおわつた。

大学の干渉をさけるために発行所を学外におき、あくまで合法的出版としての

大衆的性格をつらぬいた。藤谷の回想によれば一度も発行禁止等の処分を受けたことはなかつたが、毎号一〇〇ページ内外で五〇〇—一〇〇部を発行し、同窓会や研究会のルートの配布や他学園の連絡員を通じて販売された。経営は苦しく、行きづまる映画鑑賞会をもよおして、その収益で辛うじてささえたという。

編集人ははじめ先輩で大阪の弁護士三輪勝治に頼んだが、やがてかつて「唯物論研究」の発行人をつとめた草野昌彦（法政大学哲学科出身）にかわり、事実上の編集長として執筆にもあたつたといふ。



『世界文化』創刊号



『学生評論』創刊号と6号

『学生評論』と「世界文化」の共同主催だった。

『学生評論』のもうひとつ活動は、毎日新聞京都版に定期に掲載された「カレッジ・セクション」の執筆を受け、大学生活をめぐる記事を関係者がかわるがわる書いたという。当時各新聞社は「学生評論」に注目し、何が重大ニュースがあると記者たちが関係者に感想を求めてきたという。その際に応対したのは主として永島孝雄だつたらし

い。永島はすでに運動経験をつんでおり、草野は戦後も京都で中学校教員・校長などをつとめ、晩年に立命館大学土曜講座の熱心な聽講者後援者として、當時その運営の責任者だった筆者と何べんかの接触があつた。あの頃に話をきいておけばとの後悔がある。「世界文化」「学生評論」は戦後に復刻されたので図書館等で閲覧が容易であり、またそ時下抵抗の研究みすず書房、一九六八）が存在するので、これ以上の説明ははぶくが、蘆溝橋事件直前までこの雑誌がつづいており、前号紹介の三七年五月二七日滝川事件記念日の朝日会館での末川博をむかえた集会は、「学生評論」と「世界文化」の共同主催だった。

『学生評論』の中でも指導的存在だった。ある時コミニンテルン第七回大会のディミトロフ報告が「ラムネの作り方」の標題で編集部に郵送されてきて、編集部員たちが回し読みしたところ、半月ほどたつて永島は回し読みをやめさせ、それを警察に届けようと言った。郵送者が警察のまわし者でなかつたとしても、安全策をとる方が合法性をまるために最善だという理由である。だが他の者はもつともな意見だが感情的についていて封筒におさめて封をし、そのまま卓上に放置して、だれも見なかつたことにしようと提案したという。永島は逮捕されからも非転向をつらぬき、事実上の獄死をとげた。関係者のたたえる人物だつた。その永島も合法性の維持のためにこのようにせん細な注意を払つたのである。

しかし合法・非合法の別など、時間の進展とともに特高警察の方が簡単に乗りこえていった。蘆溝橋事件後、九月には国民精神総動員の内閣訓令が出され、一月には大本營が設置された。戦時体制に入つたのである。他方、日本共産党再建をめざす春日庄次郎らが一二月に大阪で日本共産主義者団を結成し、京大の活動分子に手をのばして、参加を求めてきた。合法的活動を第一に重視してきた京大の学生たちは、いかにすべきか、難しい問題に直面したのである。

（以下次号、小見出しは編集部）

# 憲法垂れ幕と蜷川虎三知事

村島 昭男

京都で、日本平和委員会全国大会が開かれたのは、一九六七年だった。その大

会に東京平和委員会の一員として、私も参加した。

平野義太郎会長は、開会発言に統いて、来賓の京都府知事蜷川虎三氏を紹介され

た。

「蜷川さんは昭和初年代、共にドイツのハイデルベルクに学んだ、私の最も敬愛する友人です。知事という御多忙の中をおいで頂き感謝申し上げます。想い出すとあの頃、私達は休日にはよく杜と古城のこの街のレストランで、逼迫する歐州情勢や、故国の戦雲の兆しを眉をひそめて語り合いました。しかし憂いは蜷川さんの健啖を妨げるものではなく、いつもカツレツを二人前平らげられたのを思い出します。ナチスが台頭し始めていましたが、古い大学都市ハイデルベルクは、ワイマール憲法下、静かな緑の森の中で、自由と平和に息づいていました。今の蜷川さんの日本国憲法への思いは、あの頃につながっているかと想います。」

小柄なイガ栗頭の平野さんは対照的な、ずんぐりした体躯に太い黒縁の眼鏡をかけた蜷川さんは、どつしりした足取りでマイクの前に立つと、体相応の太い

声で

「京都での大会、心から歓迎致します。

平野さんを始め皆さん、知事選へのお心遣いをお礼申し上げます。カツレツ二人前はお話の通りです。相変わらず食いしん坊で、医者から注意されておる次第です。でも料亭には行きません。お昼は細君の握り飯です。」

蜷川さんはこのあと大要次の様な事を話されたが、必ずしも当日の話とは限らず、後日の話や、著書等の記憶が混つているかも知れない。

「府庁舎の前の垂れ幕『憲法を暮らし



の中に生きなさい」は、改憲論の台頭に危機を感じて掲げました。平和ほど尊いものはありません。こんな憲法を持ちながら、宝のもじ腐れになるのがもったいのうて、中味もさる事ながら、その有効利用を呼びかけたのがあの垂れ幕です。床の間の飾りものや、お蔵入りしないで、精一ぱい活用しようが主旨です。

憲法に限らず、日本人は法律や条例を避ける所があります。帝国憲法下、法律や条例によつて散々いじめられて来た国民には、法律はお役人が作つて、国民を縛りつけるものという意識が抜けないのはもつともです。しかし日本国憲法や地方自治法は、戦争の反省に立ち、主権在民の中から生まれたのです。憲法や法律は国民を規制するものから、国家権力を規制するものに変わつたのです。

憲法や自治法を押し立てて、国や自治体にあれやれこれやと要求するのに役立つのです。」

立つのです、軍備の為の税金負担など憲法には書いてまへんとも言えます。憲法も法律も使わんと銷ります。それがあれと要求するのに役立つたとしていると思つています。」

蜷川さんの、丹後の海での獲る漁業か

ら耕す漁業の提唱は先駆的役割を果たしましたし、蜷川さんの発想の中にはいつも、住民が主人公、この住民の要求を組織し、住民自らの要求を闘いで、國や自治体を動かす。この住民自治という民主主義の涵養に努められた所に、京都の革新府政の真骨頂がある。

「上からの施策の前に、住民自身が要求を組織し、署名や声にして持つて来る。憲法はそれを保障しているし、期待してゐるんです。その憲法を変えるなど、うつけ者の言う事です。」

統計学の専門家だった蜷川さんはまた統計学は客観的事実を科学的に解析・評価してその法則を数値化する學問です。しかし精神や思想、教育の理念は數値化出来ません。良心や自由という心の領域を、為政者の計りで量るのは「反動」です。」

蜷川さんはまた、一九七〇年四月、京都で開かれた平和集会参加者全員に、憲法冊子を下さった。ブルーの地に能面を配したシャレタのもので、開くと大西良慶清水寺貫主、末川博立命館総長、蜷川京都府知事が鼎談され大西貫主の「こんな有難いもんあらへん、憲法をお経のかわ

りに読んだらええ」は言い得て妙。昭和四二年発行の憲法抄は今も私の座右にある。

その夜、末川総長が代表团を招いて立命館大学の屋上から、自慢の京都の夜景を案内下さった。東山の山々が夜空に黒

い稜線を描き、静かな街の灯が古都の情趣をかもしていた。これが四〇年近く前、京都の民主運動

の先哲、最高の知性と見識に輝く人士にお会いした日の記憶である。

(7・4・5)

## 京都のまちづくり運動を網羅

### 京都破壊に抗して 市民運動20年の軌跡

木村万平・著



京都破壊に抗して  
木村万平

ど、資料も豊富に収録されている。本書がなければほとんどの運動については後の時代に記録が残らないと思われる貴重な仕事である。(かもがわ出版 定価3200円+税 A5判385ページ)

きむら・まんぺい

一九二四年生ま

<div data-bbox="6

# 忘れ得ぬ人

原田久美子さん

「子煩惱のわが父なりしも

半生を植民地の支配に

関わりて逝く」

褐色の骨片となりて父還る

十歳の夏のかなしみ消えず  
(一九三七年晩夏)

「一〇〇〇年カレンダー（非核の  
政府を求める京都の会）

原田久美子さんは、「非核平和への  
私の願い」二首を詠みました。私には、  
「真つ本当に生きるのですよ」と指針を  
残されたように思えてならないので  
す。その生涯を昨年五月一六日、七九

（一九八一年、私家版）によつて語ら  
れています。久美子さん誕生の一九二

六年（大正一五）は朝鮮の公立中学校  
の配属将校の家庭でもありました。

歳にて閉じました。

原田さんのご両親（愛・光子）とご  
家族の愛情細やかな暮らしは、ご自身  
が執筆編集された『原田愛と光子』

（一九八一年、私家版）によつて語ら  
れています。久美子さん誕生の一九二  
六年（大正一五）は朝鮮の公立中学校  
の配属将校の家庭でもありました。

原田さんは、初対面の私に「大学進  
学を考えたこともあつたけれど……」  
と鳥取から上洛された頃を回想されま  
した。私が北海道苫小牧での職場経験  
を経て、立命館大学文学部へ社会人入学  
したことと重なる部分があつてか、ゆ  
つたりとした時間を割いてくださいま  
した。

原田さんは夏に弱くいらしたにもか  
かわらず、京都の暑さと緊張した日々  
に体がついて行けない私の方を気遣つ  
てくださつたのです。新京極でウナギ  
をご馳走になつたこともあります。

また、鳥取では「日中戦争初頭に戦  
死された原田愛中佐の遺見」としての  
少女時代であつたそうです（ご同郷の  
松尾尊児氏による「原田久美子さん  
の思い出」京都民報Web 2006・  
5・29）。

私は、原田久美子さんの連載「物語  
京都の自由民権運動」（『京都民報』）  
に感動した一人です。有名民権家の活  
躍を追う叙述とは異なる、地域での自  
由民権運動の群像に、社会運動への確  
信とおもしろみを見出し、我が郷里に  
も思いやつたものでした。

六年前に、自由民権運動と女性の関  
わりを質問しました。すると「男性が  
主体の運動でしたから、女性はさまで  
まな形でそれを支える役割をはたし、  
かつ運動の記録の伝達者としての役割  
も担つた場合が希ではなかつた」こと、  
大学紛争の中、一九七〇年夏のこと  
です。

執筆者は女性であり、購読料月額四  
十円の頃の『京都民報』を切り抜き、  
何としてもお目にかかりたく、丸太町  
電停角の「ごま蕎」店へ向かいました。  
大學紛争の中、一九七〇年夏のこと  
です。

原田さんは、初対面の私に「大学進  
学を考えたこともあつたけれど……」  
と鳥取から上洛された頃を回想されま  
した。私が北海道苫小牧での職場経験  
を経て、立命館大学文学部へ社会人入学  
したことと重なる部分があつてか、ゆ  
つたりとした時間を割いてくださいま  
した。

原田さんは夏に弱くいらしたにもか  
かわらず、京都の暑さと緊張した日々  
に体がついて行けない私の方を気遣つ  
てくださつたのです。新京極でウナギ  
をご馳走になつたこともあります。

原田さんは、みつが兄の病没後も墨  
書された「国約憲法制定願願書」を婚  
家の人々と共に保存し続けたことを  
「大宮みつ覚え書」（『女性史学』（第七  
号年報一九九七年）に明らかにしてい  
ました）。後に同年報とともに既刊第十  
号までも送つて戴いたものでした。

こうして思い返しながら、原田さん  
ならではの、学ぶ姿勢への叱咤激励の  
恩恵に与つてきたことに深い感謝を捧  
げたく存じます。

（岸 伸子）



京都民報に連載していた  
頃の原田久美子さん

## 京都の自由民権運動を発掘

この対談本『金子兜太と鶴見和子の“米寿快談”』にじょく発されて、古書棚の奥を探して、かつて情熱的に読んだあれこれの歌集を見つけひっぱり出した。いつの間にかそれ程興味をもたなくなつた歌集だが、この対談から生まれた情感のおもむくままに読んでみる。

ると、おかしい程自分が若がえつたりすることに気づき、恥ずかしい思いも生まれる。しかし、勇をこしてそのまま記すと次のようになる。

①やわ肌のあつき血汐にふれも見で  
さびしからずや 道を説く君

あまりにも有名な与謝野晶子・みだれ髪である。

は、呆けのはじまりかと思う。しかし呆けてもいい、若い日への回帰、これは空想的欲求というものか。

③露の世は露の世ながらさりながら（一茶）

（山上憶良、同前掲書）  
故に憂へぬのみ

多田富雄さんが好きな句として書かれてあつた「露の身ながら」からもったわけですが、この句に出会つただけでも値打ちものだと思う。

フワーとした若い頃への回帰した気分が、この句によつてばっしと現実に立ち戻つた感。

この「さりながら」精神は一茶の少し斜にかまえた人生観・社会観の一端かとは思うが、この世を生きる自らの心の在り様の表現として何とすばらしい！

と思うのですが。それを本の題名に「露の身ながら」と

万葉集に掲載されているそうです。中国の古書からの引用だそうですが、憶良さんの時代も今も、人の死にまつわる心の問題は同じなんだと妙なところに感じ入つたもの。④のように悟るか⑤のように死ぬ日がわかつてないから気楽にしておられるのか。

まず当分はこっちの方で生きて行こうと、罰あたりな自分である。

⑥陶枕に風の流れで耳冴ゆる

## 大江 洋

「さりながら」と生きぬく氣力の何

と魅力的かと思うが、自分はなかなか

そうはならぬい加げん。この句は俳



## 続 近況あれこれ——鶴見和子・金子兜太対談本に触発されて

### エッセイ

与謝野晶子はいいんだけど、その孫というのが大臣でチョロチョロTVに出てくるので興味めするのだが…。しかしこの歌、昔、自分に言ってくれてるような思いをもつたことを思い出す。心がフワードホグれるような。最高にして、永遠の演歌の源泉といえるのではないかなどと今になつて思つてみる。

とり入れるなんていうのは実に人生のおしゃれ感覚だと感服の至り。

④死後は医の材になる身の花見かな

（窪田あさ子、大岡信「折々のうた」から）

病気なのか、年老いたのか、死を遠くない日に迎えている人、遺体を提供する段取りをしてさつぱりした気分。孤独を感じさせるが、それもその人の生き様、俺も花見など、もっともつとやつとかにやらぬ、と教えられた。

②砂山の砂に腹這い 初恋のいたみを遠くおもい出づる日（石川啄木）  
男たるもの誰もが昔体験したような気がする歌。二十七歳で亡くなった啄木だから、「遠くおもい…」といつても、今の俺が共感し、センチになるというの

（二〇〇六年八月三日 記）

# 京都の民主運動史を語る会10月例会 ご案内

語る人 清水千鶴さん（南区在住）

## レッドページの思い出

1950年、京都簡易保険局に勤めていた清水千鶴さんは、共産党員を理由に解雇されました。全通京都地区本部や簡保の職場での闘いと、活発だった文化運動など

を語っていただきます。お誘い合わせご参加ください。

とき 10月11日（木）午後2時～4時  
ところ かもがわサロン（上京区堀川出水西入る）

例会は隔月に開きます。どなたでも参加できます。会員は無料、会員外の方は300円。



## 情報スクラップ



### 治安維持法特別展ひらく

治安維持法犠牲者国家賠償要求同盟

京都府本部主催の「治安維持法特別展」が8月22日から28日まで下京区のひとまち・交流館で開かれた。治安維持法下での弾圧の歴史や学連事件、山本宣治ら京都での弾圧とたかいなどをパネル展示したほか、「小林多喜二」「日本の憲法」のビデオも上映された。

ビード「原爆展」の写真パネル12点が展示された。

### ◇◇催し案内◇◇

中野信夫白寿記念絵画展 9月18日

（火）～23日（日）正午～19時（最終日は17時まで）。ギャラリー・ビルゲート（寺町三条上がる）。中野氏は明治43年生まれ、保険医協会や府市民団体協議会の代表として長年活躍、近年

は本格的に絵画を始め、個展や画集の刊行も。来年白寿を迎えるが今回、未発表の作品を中心に並べる。

### 映画「ヒロシマナガサキ」上映で

#### 中西伊之助の『農夫喜兵衛の死』を出版

宇治が生んだ作家・社会運動家、中西伊之助の代表的作品『農夫喜兵衛の死』の新訂版がこのほどつむぎ出版から発行され、9月2日に記念講演会が宇治市民会館で開かれた。中西伊之助顕彰会と同研究会が主催。伊之助は1887年生まれでことし生誕120年、戦後共産党の衆院議員を二期つとめた。

川合葉子さんがトーク  
スティーヴン・オカザキ監督が14人の被爆者の証言と、実際の爆撃に関与した4人のアメリカ人の証言を軸に作ったドキュメンタリー映画「ヒロシマナガサキ」の上映に合わせ「原爆展掘り起こしの会」の川合葉子さんが8月11日、京都シネマで占領下の「原爆展」開催の模様などを話した。

また同映画上映期間中、映画館の口

救援美術京都展 10月13日（土）～16日（火）、ラボール京都大ホール（問い合わせ）国民救援会府本部 821

澤地久枝講演会 10月20日（土）午後1時開会、シルクホール（京都革新懇主催）

河上肇記念会07年度定期総会 10月21日（日）午前10時受付開始、法然院

で。10時半より本堂で法要・法話のあ

と墓参。11時議事、11時半より濱口晴彦氏が「ワーキング・ミゼラブルについて」講演、あと昼食、意見交換。会費5千円（昼食代とも）。問い合わせ⇒ 072・833・4671



前号に続き今号も12頁建てです。当然のことながら印刷代がアップされ、いつまで続けられるのか心配しています。なんとか誌面の魅力で読者（会員）を増やし、安定した財政を確立したいのです。みなさまの一層のご協力を願っています。前号で募集した「忘れ得ぬ人」に早速原稿が寄せられました。原田久美子さんは、私が京都民報編集長時代、「自由民権運動」の連載を依頼し、毎週原稿を受け取っていましたのを思い出します。引き続きこの欄に寄稿をお待ちしています。「この一枚」「一本」の欄にもどしどし投稿をお願いします。

（湯浅）